

2011年3月11日

京都市長 門川大作 殿
京都会館
管理者 京都市音楽芸術文化振興財団 御中

社団法人 日本建築学会
会長 佐藤 滋

京都会館の保存要望書

拝啓、時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より、本会の活動につきましては、多大なご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。さて、今般、新聞記事等の報道により、京都会館の大規模な改修計画が進んでいると聞き及んでおります。

ご承知のように、京都会館は日本を代表する建築家であった前川國男の設計によって、1960年に竣工し、戦後の日本のモダニズム建築を代表する極めて重要な建築です。本会も竣工時点において、その建築作品としての価値を評価し、昭和35年度の日本建築学会賞（作品）を授与致しました。また、本会の評価だけにとどまらず、京都会館は、建築業協会賞、建築年鑑賞、照明学会賞など、多くの賞を受賞しています。さらに、時間を経た現在においても、その建築的価値への評価は不動であり、2000年には、本会近畿支部が「関西のモダニズム建築20選」に選び、2003年には、日本を代表するモダニズム建築のひとつとして、世界遺産を統括するユネスコとも関係の深い国際組織 DOCOMOMO（モダン・ムーブメントにかかわる建物と環境形成の記録調査および保存のための国際組織）の日本支部によって、「DOCOMOMO Japan100選」にも選定されており、その評価は国内だけにとどまらず、広く海外へも伝えられております。

京都会館は、京都の文化ゾーンとして、市民の心のよりどころとして親しまれている自然と建築とが調和した岡崎地区に位置し、長くその景観形成に欠かせない存在として風景の一部となってきた建物です。また、そこに試みられた建築的方法は、開かれた公共空間の実現や、木造文化の伝統と近代的な建築との融合を果たしたという意味からも、これからの都市と建築のあり方を考えるにあたっても極めて重要な建築遺産と言えるものです。

今後の計画立案におかれましては、これまで守られてきた建築的価値、歴史的価値、都市環境的価値を十分に尊重していただきますよう、ご理解を賜りたく存じます。

貴下におかれましては、この貴重な建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値についてあらためてご理解いただき、このかけがえのない文化遺産が永く後世に継承されますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。

なお、本会はこの建物の保存に関して、できる限りのご協力をさせていただき所存であることを申し添えます。

敬具

2011年3月11日

京都会館についての見解

社団法人 日本建築学会
建築歴史・意匠委員会
委員長 谷 直 樹

京都市の岡崎地区に建つ京都会館は、京都の戦後復興の象徴として、戦前に焼失した公会堂の再建という市民の切実な願いを受けて、国際観光都市を目標に掲げ、高山義三市長のリーダーシップにより、厳しい財政事情の中、市民からの寄付金や観光税の創設といった手段を講じて建設された。クラシック音楽を中心とする多目的ホールと劇場、国際会議場などからなる複合文化施設である。1957（昭和32）年7月に行われた3者による指名設計競技によって設計者を選び、翌年の1958（昭和33）年7月に着工、1960（昭和35）年4月に竣工している。設計は、指名設計競技の当選者で、戦前戦後の日本近代建築を主導した建築家の一人である前川國男（1905～81年）が手がけ、施工は大成建設が担当した。鉄筋コンクリート造、地下1階、地上3階、建築面積7,779㎡、延床面積16,852㎡の、当時の京都において最大規模を誇った本格的な公共建築として誕生する。

京都会館は、竣工した時点において、数多くの賞を受賞している。まず、本会によって、50件にのぼる候補作品の中から、坂倉準三の羽島市庁舎と共に、昭和35（1960）年度の日本建築学会賞（作品）を授与された。その他にも、建設業協会賞、建築年鑑賞、照明学会賞を受賞している。また、その後の年月を経た近年における再評価の動きも顕著である。2000年には、日本建築学会近畿支部によって、「関西のモダニズム建築20選」に選ばれ、2003年には、近代建築の文化遺産としての価値と保存を提唱する国際的な非政府組織の日本支部であるDOCOMOMO Japanによって、日本を代表する「DOCOMOMO Japan100選」に選定され、世界へと伝えられた。竣工から半世紀が経つものの、今なお原型を良くとどめており、日常的なメンテナンスを施されながら現在まで大切に使われてきた。

京都会館の有する、建築史的価値、歴史的価値、都市環境的価値については、次のようにまとめることができる。

1. 日本の戦後モダニズム建築を代表する重要な建築であること

モダニズム建築とは、装飾を排したシンプルな造形志向と合理的で機能的な建築の追求をめざした、1920年代の西欧に始まる工業化を前提とする新しい建築の潮流である。ここでは、当初、世界に共通する普遍的な方法を求めようとする傾向が支配的であった。しかし、戦後の1950年代に至ると、それぞれの国や地域の特性や歴史性を活かしたモダニズム建築への模索が世界各国で始められていく。こうした中で、長い木造文化の伝統を巧みに継承した日本のモダニズム建築に注目が集まるようになる。

京都会館は、そのような時代の機運の中にあって、書院造りに範を得た流れるような平面計画と、コンクリート打ち放し仕上げの簡素で骨太な柱や梁、水平線を強調した庇やバルコニー、寺院建築の屋根に倣ったようなホールの大屋根など、随所に日本の伝統建築に学んだ造形表現が、確信をもって試みられている。そこには、実は、戦前以来、モダニズム建築と伝統との関係をテーマとしてきた前川國男の長い試行錯誤が蓄積されていた。その結果、「禅寺のもつ素朴ではあるが力強い荘厳にも似通うものをいみじくも現出してい

る」ことなどを推薦理由として、日本建築学会賞を受賞し、海外の評論家にも絶賛されていく。こうした意味からも、京都会館は、日本の戦後モダニズム建築の到達点を具現化した重要な建築であると位置づけられる。

2. 前川國男の設計方法論上の転換点を示す重要な建築であること

前川國男は、20世紀を代表する世界的な建築家であるル・コルビュジェ（1887～1965年）のパリのアトリエに最初に学んだ日本人であり、彼を通して吸収した最前線のモダニズム思想を日本へと移入し、定着させることを生涯のテーマとした。その設計活動を通して、前川國男が戦前から戦後にかけて日本の建築界に果たした役割は極めて大きい。本会は、その業績に対して、京都会館を含み、史上最多となる6度の日本建築学会賞（作品）を贈り、日本建築学会の賞に大賞の制度が創設された際、その「近代建築の発展への貢献」を讃えて、前川國男を最初の受賞者に選んでいる。さらに、丹下健三（1913～2005年）や大高正人（1923～2010年）、鬼頭梓（1926～2008年）ら、戦後に活躍する多くの建築家を育て、日本建築家協会の会長などを歴任して建築家の職能の確立に尽力するなど、その賞にふさわしい多大な貢献をなしたといえよう。

前川國男は、戦前期には、旧来の様式建築が主流だった中で、公開設計競技を通してモダニズム建築の可能性を提示し、戦後に入ると、戦争で立ち遅れた建築の工業化や軽量化、近代建築構造の確立に向けたさまざまな試みによって、合理的で機能的な建築の普遍的なあり方を実践していった。そうした中で、前川國男は、次第に合理的な建築の追求が孕む問題点に気づいていく。京都会館は、そのような自覚の下、日本古来の伝統にある焼き物のタイルを外壁に使い、大きな庇をめぐらすことによって建物を統合するなど、モダニズム建築の考え方にはなかった方法へと踏み出していく。そして、そのことを通して、後の埼玉県立博物館（1971年）や熊本県立美術館（1977年）に代表されるように、日本の気候風土や周辺環境と調和し、時間の中で豊かに成熟することのできる日本独自の洗練されたモダニズム建築の追求へと向かうのである。その意味で、京都会館は、設計方法論上の転換点を示す重要な建築であると認めることができる。

3. 都市的な公共空間の創出を試みた優れた建築実践の具体例であること

京都会館で試みられた方法として、前川國男がもうひとつ重要視していたのは、建物によって囲まれた都市へと開かれた公共空間の創出というテーマだった。そこでは、高さを抑えながら、内部の機能によって建物を分棟化し、それを水平の庇やバルコニーでつなぎ、ピロティを設けることによって、ゆるやかにL型に囲われた中庭を創り出すことが試みられている。このようにして生まれた外部空間は、市民が気軽に立ち寄り、長い時間を過ごすことのできる憩いの場所として、現在までの長い間にわたって親しまれてきた京都会館の核となってきた。こうした都市的な公共空間の創出という試みは、戦後のモダニズム建築に求められた大きな課題だったものあり、現代都市においても、依然として十分な形で実現されたとは言い難い。前川國男はそのテーマに応えようと、長く試行錯誤を続けてきた数少ない建築家の一人なのである。そして、京都会館以降も、埼玉会館（1966年）や東京都美術館（1975年）などで、さらなる公共空間の展開を試みていく。このような点からも、京都会館は、広くこれからの建築と都市の関係性を考えていくにあたって、貴重な先駆的事例としての意味を持ち続けていると考えられる。

4. 京都の歴史的景観を形づくってきた象徴的な建築であること

京都会館の位置する岡崎地区は、1895年に建立された平安神宮以降、京都府立図書館や勧業館、京都市公会堂、京都市美術館などが次々に建てられ、京都における文化ゾーンとしての役割を長く果たしてきた特別な場所である。同時に、遠くに東山の美しい山並みを

望み、疎水の流れと桜や檜並木など、自然と建築の融合する京都らしい穏やかな風景が大切に守られてきた、京都の人々にとって心のよりどころとなる、かけがえのない場所でもある。このような中であって、前川國男は、すでに当初の指名設計競技の時点において、「環境との調和」というテーマを掲げて設計を進めていたことが当時の資料からは読み取れる。そして、「巨大なマスの高層建物を置く事は、公園地帯全域に対して不均衡を来すもの」として、「建物全体を中層の高さに収め水平に延びた屋根面から大ホールの屋根、小ホールの舞台フライの部分のみを突出せしめる水平線的な構成をとった」のである。このような計画段階における確かな建築思想に支えられていたからこそ、京都会館は、その大きさにもかかわらず、巨大さを感じさせない落ち着いたたたずまいを持ち、周囲の建物や環境と調和し、むしろ、岡崎地区の景観の指標として、今の風景を守ってきたのだといえる。

以上のことから、京都会館は、優れた建築史的価値だけでなく、歴史的価値、都市環境的価値をも有する貴重な建築である。





(撮影：玉田浩之氏)